

經國の大業

土田龍太郎

魏の武帝文帝陳思王すなはち曹操曹丕曹植のことあはせて三曹と呼びならはせるは、この父子兄弟三人、いづれも生れつきたる詩賦文章の才のきはなかりしがゆゑなり。三曹の勝り劣りをしかと定めむはかたかるめればそはせでもこそあらめ、ことに著述に励みかつて勅成せし篇卷いとあまたにて百篇にも及ばむとせしは文帝曹丕にほかならず。されば三國志の撰者陳壽

文帝天資文藻下筆成章博聞彊識才藝兼該

てふ評語もて魏書文帝紀をとぢめたり。この曹子桓かつて諸儒をして經傳を撰集類從せしめておよそ千餘篇となれど、これを皇覽と曰ひしこと同じ文帝紀に記せり。

さらに文帝の筆になりし典論といへる書あり。これひろく經傳文事を論へりとおぼしけれども、もと五卷もしくは二十篇よりなりたりといへり。これら諸篇の内、自叙は裴松之の三國志註にさながら引かれ、論文は文選に収められて今に傳はりたり。典論論文の字數すべて五百に足らねども、文章の要たるべきことくさぐさ論ひたればおもしろきことよなし。

初めに筆を起して世の文人のややもせばみづからの勝れるところをたのみてよその劣れるところを譏るともがらの少からぬを述べて、やがて孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・庾瑒・劉楨てふ當代に名を馳せたる七人を列ね、おのおのの才藝のほかにきはだてるところを言短かに説き示せり。三曹父子いまだともに世に在りし建安のころほひ、かたみに文藻を競ひて時めけりしこの七人、建安七士とも鄴下七士ともいひて今に至るまで稱へられたるは、初め文帝、その論文の内に七氏の名を列ね、後に梁の昭明太子蕭統、みづから纂輯せし文選に収めしがゆゑにほかなきなり。

典論論文の今の世まで弘く知られぬるは、建安七士の名を列ね品騭を試みしゆゑなるはさることなれども、そのみにてもあらず、この一篇をことに重からしめしは、建安七士論にただに續きて文帝の唱ふる文章經國論なることはたまぎれなきなり。七士の稟質の人ごとに異なるさまを一わたり述べて後に

蓋文章經國之大業、不朽之盛事

と文帝の説けるは、文章の道の究まるところを短き對耦にこめたる千古の金言と云ふをうべし。そも文章いかなれば經國の大業たるをうべきや、そのゆゑよしを述ぶること左のごとし。

年壽有時而盡、榮樂止乎其身、二者必至之常期、未若文章之無窮、是以古之作者寄身於翰墨、見意於篇籍、假良史之辭、不託飛馳之勢而聲各自傳於後

人の壽命は時ありて盡き世の榮華は限りあれども、翰墨は典籍に託りて亡びず、文人の聲譽は永く後の世に傳はるをうるなり、と云へるが一節の趣意なりとせばほほ誤りなかるべし。かかる説きざまげに平らかにて、世のなべてのものにはうべうべしく聞ゆめれども、わが國のさとび言にて人は一代名は末代といへるにさまで異ならず、なにとやらむ淺々しくて深き心ありとはなかなか思ほえねばいともあかぬ心地す。

文帝さらに數句を費して、財の賤むべく時の重んずべきことを説いて後

融等已逝唯幹著論成一家言

と記して一篇を結びたり。この結句、孔融等はすでにみまかりぬれど、徐幹の筆に成れる中論二十篇は亡びずてなほ世に傳はれることを云へるにまぎれなし。されど建安七士のものせる篇章のさなから傳はれると断章のみ諸書に引かれて遺れるとありて、いづれも清の楊逢辰もしは現代の兪紹初の輯校せし建安七士集に収まりて今見るをうべければ、徐幹の中論のみが亡びざるにてはあらず。一篇の末にて徐幹の文業をわけて譽むるやにも見ゆれど、さすべきいはれありやいぶかしきかたなきにあらねば、文帝の趣意いささか捉へがたきままにてやむほかなきぞいとほいなき。

そも文章といふもの賢き人の智慮思惟情感の凝り集まりしそのすゑに顕るる精華なりとせば、ことわざしげき世のいとなみのあるが内にてたうときといはむかたなし。文章を成り立たしむるは語言にほかならぬはいはでもしるけれど、ただ語言の羅りのみにてはことたらはず。語言にそのかひあらしめむとせばゆめたがふまじき掟のごときものあり。語言にはまたくすしき力そなはりて、この力がかの掟にそひつつあひはたらきてはじめてめでたきあやをなすにぞある。このはたらきのあやしうかそけきことよなし。作者だに知らぬうちに、讀者をしてなべてのものえ及ばぬ深きさかひに入らしむるわざあるにたり。さればまこと秀れたる文章の時に及んで國を經るたよりのなるはげに避りがたきことわりにて、かく考へもてゆけば、魏文帝の金言おのづからに悟りうべし。

すでにけみせし文章經國論、文の表にてはおぼめかしきところなきにしもあらねど、いかなるついでにてもあれ、文章經國之大業なる句のふと心にきざすことのありけむは、この魏文帝に生れつきたる叡才のなめならぬことの證しなりともや云ひつべからむ。

(令和六年二月二十六日受附)